

— 次の問いに答えなさい。

問1 — 線部を漢字に直しなさい。ただし、送りがなの必要なものは、それもふくめて書きなさい。

- ① 世界イサンに登録された。
- ② ステキな中学生になれそうですね。
- ③ 自分のアヤマリに気がつき、青くなった。

問2 — 線部の読みを、ひらがなで答えなさい。

- ① 遠くから列車の汽笛が聞こえる。
- ② 七夕の夜に、天の川を見上げる。
- ③ 木の枝が弓なりに反る。

問3 次の漢字の中から、他の漢字と部首が異なるものを選び、記号で答えなさい。

ア 秋 イ 利 ウ 種 エ 科

問4 次の熟語と意味の組み合わせの中から、まちがっているものを選びなさい。

ア 割愛：余裕がないため、文章や演説などの一部を省略すること。

イ 英断：すぐれた判断をして、思い切りよく物事を決めること。

ウ 息災：休む間もなく、次から次へと災いに見舞われてしまふこと。

エ 閉口：どうにもならなかったり、手に負えなかったりして困ること。

問5 次の動物の中から、「十二支」にふくまれないものを選び、記号で答えなさい。

ア 蛇へび イ 虎とら ウ 鹿 エ 鼠ねずみ

問6 次の言葉と同じ種類のものを、後から選び、記号で答えなさい。

「走る」

ア 美しい イ 大切だ ウ これ エ 思う

め みみ はな

最初に、人間の体の話から入りましょう。私たちの^①体の部分部分には、どうしてこのような名前が付いているのでしょうか。

顔には、目があつて鼻があります。なぜ、目を「め」、鼻を「はな」、耳を「みみ」というのか。さらに歯を「は」、頬を「ほほ」、額を「ひたい」とよぶのはどうしてでしょうか。

「め」「はな」「みみ」と、ひらがなでよくよく見てみると、身近にある、何かと似ていることがわかります。植物です。芽、花、実、すべてがある。^②目は「芽が出る」の「芽」、鼻は「花が咲く」の「花」と同じ音。では耳はどうかというと、「実がなる」の「実」が二つくっついていて。そういえば、耳は二つありますね。それから「歯」は「葉」と同じ音でしょう。

1、顔の中になぜか、植物の生長過程あるいは部分の名前が入っている。これはおもしろい偶然の一致だと思つてきたのですが、どうも偶然ではなく、根拠のあることだと思ふようになりました。

まず、目はものを認識する器官ですね。そして耳は情報を受容する器官です。^③2、蛇が人間に毒を吹きかける時、狙うのは耳ではなくて目です。目をつぶせば、勝負に勝てるからです。

視覚・聴覚・触覚など、生き物の感覚機能はたくさんありますが、その第一は視覚です。視覚から得る情報は、感覚器官全体の過

半数に達するといえます。私たちは、まず目で見ることからものを認識します。つまり、目で見るとは最も基本の動作であり、最後に耳で受容することによって、認識のプロセスが完結するのです。目が認識の基本であり、耳が認識の完了であることは、賢いという意味の「聡明」ということばがあることからわかります。

また、「きく」が「聞く」と同時に「利く」であることから、耳の重要性が知られるでしょう。腕が「きく」と、耳で「きく」とことは、そうした同じような能力を表わしています。それは、「お聞きになる」ということばの古語「きこしめす」が、「支配する。受容する」という意味をもっていることから、類推できます。

このように考えていくと、植物のいちばん最初の生長段階である芽の発音が、目にネーミングされていてもおかしくはない。まず芽(目)があつて、花(鼻)が咲く。そして、末端の「は」、つまり「端」に葉(歯)が出て、成熟した存在である実(耳)で完結するというプロセスを考えると、どうして目を「め」というのか、耳を「みみ」というのか、よくわかると思います。

ところで鼻というのは、顔の真ん中に突き出ていて、呼吸をつかさどる重要な器官です。人間は呼吸することで生きていくわけですから、鼻は、生命活動のなかでは最も優先的な、命の根源、いわば「トップ」の存在です。

そういうものが「はな」。植物の枝先に咲くのも「はな(花)」。

そして岬の尖端のことを「はな」ともいいますね。すべて同じです。いろいろと探してみましよう。たとえば「はなからバカにしている」と怒ったり、「しよっぱな」「上がりばな」「下駄の」はな」といったり……。

漢字では「鼻」「花」「端」と、さまざまに書き分けますが、まずどう発音するかを考えることが大切です。私たちはつい、どういう漢字を書くのかを気にしがちです。民俗学者の柳田国男(一八七五—一九六二)は、「どんな字を書くの」と尋ねることを、「どんな字病」と名づけ、警告しました。

また以上のことは神話からもわかります。太陽の神様や月の神様が目から誕生するのに対し、スサノオノミコトは鼻から生まれています。^④

七十二年頃に成立した日本最古の歴史書『古事記』には、次のようにあります。

左の御目を洗ひたまふ時に成りませる神の名は、天照大御神。
次に右の御目を洗ひたまふ時に成りませる神の名は、月読命。
次に御鼻を洗ひたまふ時に成りませる神の名は、建速須佐之男命。

スサノオノミコトは暴力の神様で、腕力だとか身体的な強さだとか、そういう生命力の象徴だからこそ、目ではなく呼吸器官の

鼻から生まれます。この暴力的な神様につけられた「スサノオノミコト」(スサの男神)という名前自体、その猛々しさを示しています。なぜなら、サ行音は摩擦音ですね。ことに「す」で始まる古いことばには、激しい動作を表わすものが多い。「すさまじ(凄まじい)の古語」「すごむ(凄む)」などもそうです。どの言語もそうですが、日本語も音のもつ語感から離れられないのです。そういうことに注意して日本語を見ていくと、さまざまな発見があるでしょう。

それにしても鼻という器官は、顔のなかでもとくに動物的で、グロテスクな感じを与えますね。やけに目立つし、忘れられなくなるような存在でもある。そこで、鼻学という学問分野が成立するほどさまざまな考察があるし、^⑤Aの文芸作品にも、たびたび登場します。ゴーゴリの『鼻』や芥川龍之介の『鼻』など、鼻をテーマにする作家も大勢いる。それはやはり、鼻が肉体的な生命と直結する器官だからでしょう。

〔中略〕

ひたい ほほ かお

八世紀に成立した『万葉集』に、おもしろい戯れ歌があります。

吾妹子が ひたひに生ふる 双六の 牡の牛の 鞍の上の瘡

うちの女房にようぼうの額ぬかに生えた、双六盤すろくばんの牡牛おうしの鞍くらの上の腫れもの、とうたう。「ひたひ」とは「ひたい」の古語で、額のことです。つまり、おでこを「ひたい」といったのですが、ここは「ぬか」ともいいます。

深く頭を下げて拝礼はいれいすることを「ぬかずく（古語は「ぬかづく」）」というしており、「ぬか」とは「おでこ」のこと。

では、「おでこ」には、すでに「ぬか」というよび名があるのに、なぜ、あらためて「ひたい」というのかというと、この部分こそ、ものに対して人も人に対しても、真まっ直すぐに向き合う場所だと考えられたからです。

「ひたい」の「ひた」に漢字をあてれば「直」。まっすぐな道を「ひたみち」といいますが、「ひたすら」とか「ひたむき」とか、そういうのが「ひた（直）」です。つまり、相手に向き合うのは、手でも体でもなく、「ひたい」でした。

それほど「ひたい」というのは重要なところですよ。「ひたい」の内側にあるのは大脳の前頭葉。前頭葉は意思や感情、知能などの働きをつかさどる、人間にとって最も重要な部分です。

古代人は人体解剖かいぼうをしたわけでもないのに、身体構造に対する認識から「ひたひ（ひたい）」④ということばを誕生させたのだと思いついた時、私は驚おどろくとともに、感動を覚えました。

鼻の両側にある、この「ほほ（頬）」ですが、「ほ」は「秀ひいでる」という意味で、「いなほ（稲穂）」の「ほ」と同じです。つまり膨ら

んでいるからこそ「ほほ」とよばれるので、べしやんこであつてはいけないんですね。

「秀でる」という意味の「ほ」を実感するのが、『古事記』の次の歌です。

倭やまとは 国のまほろば たたなづく 青垣あをかき 山隠やまこもれる 倭やまとし 美うるはし
（大和は、国の中でも最もすばらしいところ。重なり合う青い垣根の山々にこもっている、この大和は何と美しいのだから……）

東征とうせいの果て、三重村みえのむら（現在の三重県四日市市采女町うねめのあたり）にたどり着いたヤマトタケルが、能煩野のほで故郷を偲しのんでうたう歌。このあと間もなくしてヤマトタケルは死んでしまいます。

この「まほろば」は、美称びしょうの「ま」＋秀でるの「ほ」＋愛称あいしょうの「ろ」＋接尾語せつびの「ば」で、Bをいいます。「まほろば」「ほほ（頬）」「いなほ（稲穂）」の「ほ」は、すべてすぐれたものをいう「秀ひい」なのです。

さて、古代人は、どうやら「芽（目）」を出したり「花（鼻）」を咲かせたりしながら「実（耳）」をつけていく「かお（顔・貌）」を、体とは別のものとして考えていたようです。そのとおり「かお」とは、現われる形といった内容をもつことばです。植物の朝顔・夕顔は、朝夕に咲き出すし、「どの顔さげていくんだ」「ちよっ

と顔を出した」「顔を貸せ」というのも、「顔」で体全体を表わしています。

「かお」は、体から独立した、別個の生命体だったのです。

（『ひらがなでよめばわかる日本語』中西進）

*プロセス：手順。方法。

*摩擦音：唇・歯・舌などを狭めたすき間に、呼吸をこするように通して出す音。

*戯れ歌：滑稽味のある和歌。滑稽とは、おもしろおかしく、たくみに言いなすこと。

問1 — 線①「体の部分部分」とありますが、体の部分に関する慣用句と意味の組み合わせとしてふさわしくないものを、次から選びなさい。

- ア 額を集める…顔を近づけて相談する。
イ 鼻が高い…ほこらしく思う。
ウ 耳が痛い…自分の弱点を言われ、聞くのがつらい。
エ 目を丸くする…喜びのため、目を大きく見ひらく。

問2 — 線②「目は『芽が出る』の『芽』」とありますが、なぜ「目」と「芽」が同じ音なのか。その理由として最もふさわしいものを、次から選びなさい。

- ア 「目」は人体において、ものを認識する第一の器官であり、「芽」も植物において、一番最初の生長段階であるから。
イ 「目」は人体器官の中で、最も活動的な部分であり、「芽」も植物器官の中で、最も生命力があふれている部分だから。
ウ 「目」は人間の器官の中で、すべてに優先されるものであり、「芽」も植物器官の中で同様に優先されるものだから。
エ 「目」は人間の感覚機能において、多くの情報を得るものであり、「芽」も植物において、外部を認識するものだから。

問7 Bにあてはまる語句として最もふさわしいものを、次から選びなさい。

- ア なつかしい時間 イ 美しい愛情
ウ すばらしい場所 エ たくましい山々

問8 本文の内容として最もふさわしいものを、次から選びなさい。

- ア 人間の体全体に対する認識が、植物の生長過程に対する認識と非常に似ている。
イ 植物の生長過程と部分の役割のすべてを、人間の顔に置きかえて考えることができる。
ウ 人間の顔の各器官に対する古代人の認識が、植物と共通する部分が多いことが証明された。
エ 植物と人間の顔における発音が似ている各器官では、それぞれの器官の働きや認識が共通している。

問3 1・2に入る語の組み合わせとして最もふさわしいものを、次から選びなさい。

- ア 1 しかし 2 つまり
イ 1 なぜなら 2 しかし
ウ 1 つまり 2 たとえば
エ 1 たとえば 2 なぜなら

問4 — 線③「スサノオノミコトは鼻から生まれています」とありますが、なぜ「鼻」から生まれたのですか。その理由を、本文中から十字以内で書きぬきなさい。

問5 Aに入る「過去から現在までと、あらゆるすべての所」という意味の四字熟語として最もふさわしいものを、次から選びなさい。

- ア 東西南北 イ 古今東西
ウ 前代未聞 エ 老若男女

問6 — 線④「私は驚くとともに、感動を覚えました」とありますが、なぜですか。「古代」と「現代」という二つの言葉を使って、その理由を説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

境内を出たところで、江口さんから手わたされたまつり半纏に目をやった。とうちゃんと同じ半纏だ。ばんつと半纏を広げて袖とおし、肩にあるコブを得意そうに見せるとうちゃんの姿が目につく。

神輿コブだ。

「痛くないの？」と、聞いたことがある。とうちゃんはオレの頭を手を置いて、黙章みたいなもんだと笑った。

あんなに強くて大きなとうちゃんの肩にコブをつくるくらい、きついんだ。神輿を担ぐって。

オレに、いまのオレに本当にできるんだろうか。もし、最後まで担げなかったら……。

とんつ！

背中から太鼓の音が聞こえた。腹の奥にズンと響く。江口さんの音だ。

① がんばれ、がんばれよ、そんなふうに言われている気がした。

「ただいま」

アパートのドアを開けると、「おにーちゃん！」と部屋のなかから、陽菜の怒ったような声が聞こえてきた。あわててまつり半纏を靴箱のなかにつつこむ。

「どこに行つてたの！」

「ちよつとな、ほらじゃま、どけよ」

腰に手をあてて立っている陽菜を乱暴に押しのけて、部屋に入った。

まつり半纏を借りに行くことを黙っていたことに、思わず靴箱に隠したことに、うしろめたさを感じていた。

でも、あれを見たら、陽菜はきつと「とうちゃんのことしょだ」とはしゃぐだろう。うれしそうにはしゃいで、まつりの日があるのを待ちこがれて、とうちゃんみたいだね！と、まっすぐにオレを見るだろう。

それを受けとめる自信なんてない。期待されたくない、期待されて、それを裏切るのが怖い。

オレ、とうちゃんと同じなんて、できっこないよ。

冷蔵庫から牛乳を取り出して胃袋に流しこんだ。

「あ！ コップにいれなきゃいけないんだ！」

陽菜が口うるさく、なんだかんだと言ってくる。

「おにーちゃん、うがいもしてない！ 手も洗ってない！」

うるさいな、うるさい……。

「かあちゃんに言いつけちゃうからね」

うるさい、うるさい、うるさい。

「いーけないんだ」

③ 「うるさい！」

あつ……。

陽菜の動きがぴたつと止まった。

どなつてしまった。

無性にイライラして、おさえられなかった。

そつと陽菜を見ると、陽菜は目を赤くして、オレを見ていた。

にらんでいるようにも、おびえているようにも、ただ、驚いているようにも見える。

「陽菜……」

オレが口を開くと、今度ははつきりと、ぎつとにらんで、トイレのなかに駆けこんだ。

小さく息をついて、畳の上に寝転がる。

最悪だ。

自分の不安を、自信のなさを、あせりを、陽菜にあたってしまった。

やつぱりムリ、かな。やめたほうがいいんじゃないか？ 途中で投げ出してしまうくらいなら、最初からやらないほうがマシなんじゃないか？

三日も考えて、迷つて決めたのに、すぐにラクなほう、ラクなほうへと引つ張られる。

そんなじゃダメだって、そう言いたくてとうちゃん、夢に出てきたのかもしれない。

とうちゃんの仲間に、情けないところなんて見せられない。見せたくない。

④ けど、もし今年担がなかったら。来年は出るかわからない……。どんと畳にこぶしをふるう。

決めたんだ。自分で決めたんだ。なのに、なんでうじうじしてん

だよ。

がばつと起きあがる。

視線を感じてトイレのほうを見ると、細く開いていたドアが、ぱたんと閉まった。

ふつと笑った。

「陽菜、出てこいよ。ごめん、どなつたりして。にーちゃんが悪かった」

……。

「にーちゃんさ、神輿担ぐんだぞ、今度のまつり」

かちやつと鍵を開ける音がして、静かにドアが開いた。

陽菜が顔を出した。

タツタツタツタツタツ

住宅街をぬけて川沿いの土手に出る。

神輿を担ぐと決めた日から、毎朝一時間ほど走りこんでいる。

まつりまで、あと二週間。付け焼き刃のトレーニングなんか意味がないことくらい、わかつている。それでも、なにもしないではいられない。しなかったことを、言い訳にしたいくない。

走ることは昔から好きだった。小学生のときは毎年運動会でリレーの選手に選ばれていたし、冬のマラソン大会では四年のときからかならず先頭集団のなかに入っていた。

トレーニングだと思つて走つたことなんて一度もなかったけど、

あのころは、いつも走っていた。あそびでも、学校の登下校でも。そんなオレのことをとうちゃんは「まぐろみたいだな」って笑った。

走りこんできたんだ。オレだって、オレだって同じようにやっていれば……。

まぐろは眠っているときでも、泳ぎ続けるのだという。中学になってからは、体育の時間くらいしか走らなくなった。いつもいっしょにあそんでいたヤツらは、部活だとか、塾だとか、なにやかが忙しくなったし、オレも学童クラブに陽菜を迎えにいつて、そのまま家に帰る。たまにあそぶことがあっても、あのころのように駆けまわってあそぶことはほとんどなかった。

気づかないうちに、奥歯を噛みしめている自分に気づいて、はつとした。

スピードをあげてみる。ボーボーと耳もとで風がなつて、のどが張りつくようにヒリヒリする。息があがる。足が異様に重い。

みっともねえっ。

このくらいでへばってたまるかよ。

わかつてんだろっ……。

先週の体育の時間にやった長距離走を思い出して、唇を噛んだ。

スピードをすこし落とす。あせるな。自分のリズムで、二度息をはき、二度すう。自分の息づかいにだけ耳をかたむける。

あのとき、途中まではサッカー部のふたりといっしょに先頭を走ってた。けど、ラスト二〇メートルのところでふたりがスパ

土手を駆けおりて、また住宅地に入る。東へ東へと進んでいくと小さな公園がある。ここまでで約三十分、足をゆるめて息を整えながらなかへ入った。

トをかけると、ついていけなかった。追いつこうと足を動かすけれど、思うように動かない。気ばかり急いで、あせってじれて、気づくとアゴがあがっていた。

「よし、いいぞいいぞ！」

屈伸をしていると、キリンの形をしたすべり台のむこうから声が聞こえた。

何人にもぬかされて、結局、一年の男子四十三人中十一番だった。

「おっしいな、もうすこしだ、できるぞ」

上位六位までに入ったヤツの名前が廊下に張り出された。全員、

のぞいてみると、陽菜と同じ一年生くらいの男の子が鉄棒にしがみついていた。

サッカー部と野球部だった。

「もうちよつとだなあー」

だよな。毎日毎日、夏の暑い日もあいつらはトレーニングをして

父親らしき男の人が、そのすぐ横で大げさなくらいに残念がつて

いる。

男の子が地面をトンと蹴る。

ふっ。思わずふきだしそうになった。ちつとも、もうちよつとなんかじゃない。

けど、お父さんは「ホントあとちよいだ」なんて言っている。男の子も顔を赤くしながら、コクコクうなずいて、また鉄棒をにぎる。

オレはそつときびすを返した。

——あきらめなけりや、できるんだよ。たいがいのことはさ。

そう言って笑うとうちゃんの顔を思い出した。

とうちゃんはいっただって、どんなことだって、「できるさ」と言っただけの背中を押した。ああしろとか、こうしろとか、そういうことはなにも言わなかったけど、気がつくとうちゃんがいて、オレを見ていた。

泳ぐことも、補助なし自転車にのることも、二重跳びも、高く

高く打ちあがったボールをキャッチすることも。ガキのころはぜんぶ

ぶそうやってできるようになった。大きくなれば、できることはど

んどん増えていくんだと思っていた。けど、現実には学年があがればあがっただけ、できないことが増えていく。あきらめることが増えていく。

五年の球技大会もそうだった。クラスのチームでピッチャーに選ばれた。だけど、あつちゃんのほうがコントロールがよくって、大

会の三日前に交代させられた。あつちゃんのコントロールがいいことは、オレにだってわかっていった。けど、スピードならオレのほうが速い。だから、毎日毎日、ひとりでも、雨が降っても、練習をした。だけ……。

悔しくて、腹がたつて、自分がみじめで。最初からあつちゃんに決まっていれば、こんな思いをすることなんてなかったのに。オレ、かつこうつけて、「あつちゃん頼む」なんて笑いながら言ったんだ。

がんばったって、無駄なこともあるんだ。

しがみつくよりあきらめたほうがラクだということを知って、興味のないフリをすることがうまくなった。

神輿だつて。

いまでも不安でしかたがない。でも、とうちゃんとの約束を守れないことのほうが、ずっと、イヤだ。

すーっと金色の朝日がさす。空を見あげて目を細めた。

《空へ》いとうみく

*江口さん：「とうちゃん」の神輿仲間。

*半纏：和風の着衣の一種。羽織に似た、丈の短い上着。

問1 — 線①「がんばれ、がんばれよ、そんなふうに言われている気がした」とありますが、「オレ」は神輿を担ぐことに対してどのように思っていますか。説明しなさい。

問2 — 線②「あわててまつり半纏を靴箱のなかにつつこむ」とありますが、なぜそのようにしたのですか。その理由としてもっともふさわしいものを、次から選びなさい。
ア 陽菜にこれ以上怒られないようにするため。
イ 陽菜がはしゃいでしまい、じやまになるため。
ウ 陽菜に期待させ、がっかりさせるのが怖いため。
エ 陽菜にだまってプレゼントしようとしていたため。

問3 — 線③「あっ……」とありますが、このときの「オレ」の心情として最もふさわしいものを、次から選びなさい。
ア 陽菜が大人ぶった口の利き方をするのにいらだち、大声を出したことに、後悔している。
イ 自分の精神的な弱さや余裕のなさのために、陽菜に感情的に接してしまい、後悔している。
ウ 陽菜の幼い行動を途中でさえぎり、相手をしてやれなかったことを、後悔している。
エ 年上への口の利き方について陽菜を優しく注意すべきところを、強くしかってしまい、後悔している。

問5 — 線⑤「はっとした」とありますが、「オレ」はどんなことに気がついたのですか。その説明として最もふさわしいものを、次から選びなさい。

ア 体育の長距離走で、上位の生徒と差がついたのは自分が練習していなかったためであるのに、練習量を言い訳にしている自分の情けなさに気がついた。
イ 体育の長距離走で、上位の生徒にどうしても追いつけない現実をふがいなく思い、今まで取り組んでいなかった練習の大切さに気がついた。
ウ 体育の長距離走で、日ごろから毎日部活動で走っている生徒と一緒に先頭を走ることができた自分に、やればできるのだと気がついた。
エ 体育の長距離走で、追いつきたくても追いつけない日々の練習の差を目の当たりにし、実は走ることがきらいになっっていることに気がついた。

問6 — 線⑥「きびすを返した」の意味として、最もふさわしいものを、次から選びなさい。
ア 応援をした
イ うなずいた
ウ 引き返した
エ 思い返した

問4 — 線④「どんと畳にこぶしをふるう」とありますが、なぜ「こぶしをふる」ったのですか。その理由として最もふさわしいものを、次から選びなさい。

ア 夢に出てきた「とうちゃん」の言葉を頭からふりはらうことで、神輿を担ぐ決意を強くしたいから。
イ 「とうちゃん」や陽菜とした約束は守らなければならないと、自分のことを精神的に強く追い込んでいたから。
ウ いらだちを不用意にぶつけてしまった陽菜に対して情けなく思い、心から謝ることを決心しているから。
エ 一度神輿を担ぐと決めたのに、また悩んでしまったことを反省し、再び神輿を担ぐ気持ちを固めようとしているから。

問7 — 線⑦「そうやってできるようになった」とありますが、どうすることでできるようになったのですか。説明しなさい。

問8 本文の表現の説明として最もふさわしいものを、次から選びなさい。
ア 擬音語を多くつかうことで、「オレ」の悩みが言葉にならないものであることを表現している。
イ 「オレ」や「陽菜」の思っていることを、会話の間に細かく描くことで緊張感を持たせている。
ウ 「オレ」の視点からのみ物語を語ることで、自己中心的な「オレ」の性格が表されている。
エ 回想シーンを入れることにより、読者が「オレ」の気持ちを理解しやすくなっている。

二〇二〇年度 中学校入学試験(第一回)国語 解答用紙

得点
※

一

問 1
①
②
③

問 2
①
②
③

問 3

問 4

問 5

問 6

二

問 1

問 2

問 3

問 4

問 5

問 6

問 7

問 8

三

問 1

問 2

問 3

問 4

問 5

問 6

問 7

問 8

受 験 番 号

氏 名	ふりがな

※には記入してはいけません。